

『預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、
実現しないなら、それは主が語られたことばではない。
その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。』
—申命記18:22—

過って1975年をハルマゲ
ドン成就の日と信じた証人た

考えて下さい

がいましたが「一部の熱心な信徒の願望」にすぎないと蹴されました。さらに「ハルマゲドンが来ないことによって、伝道の機会が与えられたことは幸いです」としました。今回も同様の手法が語られています。1995年11月1日号の「ものみの塔」誌では「世代」の解釈が変更されました。

—1995年11月1日号「ものみの塔」誌P17—
「これまでエホバの民は、このよこしまな体制の終わりを待たせられ、切に願うあまり、『大患難』の始まる時を推測することがあり、1914年以降の一世代の長さを算定したこともあります。しかし、わたしたちは、一世代が何年あるいは何日に及ぶのかを推測することによってではなく……歴史のある時期に住み、他と異なる一定の特徴を備えた同時代の人々をおもに指しています。」

「目ざめよ！」誌の出版目的からも「1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に」の文言がなくなりました。

しかし、今回の変更はあまりにも大幅であり、教義の根幹の変更ではありませんか。

証人は本当に真理の証人なのでしょう。

100年間以上の間「1914年を聖書預言における重要な年」と信じて誠実に伝道してい

た証人たちは誤った期待を抱いて伝道し、誤った教えを伝えてきたことにはなりません。多くの証人は本当に「1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に」を信じて人生設計を立ててきました。迫害や困難に耐え「間もなくハルマゲドンが来る」との信仰を励みとして伝道してきたのです。ハルマゲドンの到来は漠然となってしまう。このようなことが当たり前認められるなら同じことがこれからも起こるでありましょう。今回の変更された教えもいずれ変更されるでしょう。真理と確信して宣べ伝える以上大きな責任があるではありませんか。

なんと不思議なことでしょうか？マタイの福音書で内容は2千年前から明らかで変わっておりません。このような基本的な聖句を何故今頃になって、「明確に理解出来る」「洞察された」「理解の調整の必要」なのでしょう。

考えてください！！

このパンフレットを読まれた方で「エホバの証人」についての疑問、相談のある方は下記のところへご連絡ください。

〒655-0048
神戸市垂水区西舞子8丁目10-11
JW問題カウンセリングセンター
E-mail church@nishimaiko-bc.com

2013年9月29日発行



100年前、

1914年は第一次世界大戦が勃発した年でした。4年間に亘る戦いで1900万人程の死者が出たと記録されています。ヨーロッパを中心として、世界中で凄まじい苦しみや悲しみの叫びが響いたことでしょう。エホバの証人はこの状況を新約聖書マタイの福音書24章でイエスが語られた「終わりの日の前兆」と考えました。さらに旧約聖書ダニエル書4章10節から16節の「7つの時」の成就と判断したのです。最も主要な点は「キリストが天において神の国の王となられ『終わりの日』が始まったことです。」この解説は証人独特の解釈で確信に満ちているものです。



確信の根拠

1. 1971年5月1日号「ものみの塔」誌記事「転向点となる1914年 今あなたがお読みになっている『ものみの塔』誌は、すでに1880年3月号の中で、1914年がイエスの言われた『諸国民に定められた時』の終結する年であるとの、聖書の預言に人々の注意をひきました。…神の預言的なことばは、たがうことがありません。時の経過は、神の預言的なことばの真実性および誤りのない正確さを証明してきました。1914年に苦難の時代の開始を目撃したこの世代に残されている年数は、いよいよ少なくなっています。その世代が過ぎ去る前に、預言されていた『大患難』が訪れるでしょう。」

2. 「聖書は実際に何を教えていますか」付録「ものみの塔」の教えを研究する人の初めのテキストは「聖書は実際に何を教えていますか」を使います。テキストの付録に「1914年—聖書預言における重要な年」との見出しで詳しく解

[p.2へ続く]
—1—

説されているのです。この箇所を聖書を巧みに引用して、B.C.607年から2520年経過すると1914年となるとして、1914年「7つの時」の終わりと解釈します。
(以下、「聖書は実際に何を教えていますか」
P217~218)

「その2520年は西暦前607年10月に始まりました。それは、エルサレムがバビロニア人の手に落ち、ダビデの家系の王が王座を迫られた時です。その期間は1914年10月に終わりました。その時、『諸国民の定められた時』が終わり、イエス・キリストは神からの任命を受けた天の王として即位されました。……中略……そのような出来事は、まさに1914年に神の天の王国が誕生し、現在のこの邪悪な事物の体制の『終わりの日』が始まったことを、強力に証しています。」

3. 「目ざめよ！」誌での1914年の強調
1980年代の「目ざめよ！」誌の発行目的には次のような説明が書かれています。
「きわめて重要な点として、本誌は、1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらすという、創造者の約束に対する確信を強めます。」

このような教えは1880年から明言されており、「目ざめよ！」誌の発行目的の中できわめて重要な点として教えられていたのです。

以上の確信は、少なくとも100年間は変わりませんでした。

エホバの証人の特徴について

1. 聖書を正しく解釈する唯一の組織であるとの確信。エホバの証人の教えは「真理」であるとの確信です。
2. 「終わりの時」、即ちハルマゲドン（世界最終戦争）の時間を強く想定させます。すでに今までに、1918年（第一次世界大戦の終わりの時）、1975年の10月（アダムの誕生から6千年目となる）、そして「1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に」と主張してきました。
3. 熱心な宣教活動の実践。
それは、「真理」を知ったとの確信と、ハルマゲドンが近いとの危機感からの当然の帰結と言えます。宣教は神の大命令、神の愛の実践と信じて、仕事、学業、家庭以上に伝道活動を重視します。
4. 証人の中だけの強い仲間意識と人間関係。
世俗社会との分離、家族、友人以上に証人同士の仲間意識を重視します。長年証人を続けると、今までの人間関係はなくなるのが帰結です。組織から離れられない現実生活の状況が生じます。周りからの反対などを経験すると一層証人との関係が唯一の人間関係となります。たくさんの仲間がおりそれぞれが誠実であり、犠牲的であるところから、組織の教理への疑問が起こりにくくなります。



5. 組織に対する批判的すべての意見はサタンの仕業として、恐れ極度に警戒。
当然、組織の中にもと教理の矛盾などに気づくことはありません。
6. 一般の教会を常にサタンの懐として非難。
カトリックとプロテスタントの区別がわからない。同一視して非難しています。多くはカトリックについてであります。一般の教会は聖書を教えない、伝道しない、戦争に参加するなどとして、常に一般の教会批判を注視して、自己の預言の矛盾に気づかせないようにします。

エホバの証人の皆様がとても知的な方が多く、研究熱心ではありませんか。自分で考えることをされていますでしょうか。
証人の方々の信念は組織以上に聖書の真理に価値を見出されたものではありませんか。真理との確信が伝道の動機ではありませんか。
酒りを宣べ伝えることに、半気ではおられないはず。

「教理について、洞察が得られたため、幾つかの点がより明確に理解出来るようになりました。」「以前の理解でした。」「再検討されました。」「理解してきました。しかし、さらに詳しく調べるなら、……、理解の調整が必要であることがわかります。」

上記の表現を用いて、
2013年7月15日号の研究用「ものみの塔」誌で、「1914年と終わりの日との関連」の教理が大幅に変更されました。

単なる変更、調整、再検討で済ませる内容でしょうか？どのような変更があったかをまとめてみましょう。

変更点

- 今までの教え—
(1880年3月から2013年7月)
(1) 「1914年が終わりの日」の始まり。
(2) 1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に大患難、ハルマゲドンが成就します。
(3) 1914年にキリストは天の神の国の王となった。その時から終わりの日の全期間にわたって羊と山羊の裁きは行われます。

- 変更された教え—
(2013年7月15日号研究用「ものみの塔」誌)
(1) 「1914年に始まった出来事」は大患難ではなく「苦しみの激痛の始まり」
(2) 国連（現代の「嫌悪すべきもの」）が、キリスト教会（一般のクリスチャンから見て聖なるもの）と大いなるバビロンの残りの部分を攻撃する時、大患難が始まります。
(3) キリストは天において王となっているが王座にはついていない。国連の攻撃の後に王座に就く。偽りの宗教が減んだ後に羊と山羊の裁きは行われます。

今回の変更の特徴は、...

- ・「1914年」と「終わりの日（大患難、ハルマゲドン）が成就します」との関係を希薄にすること
 - ・大患難ハルマゲドン、「国連が教会を攻撃したのち」とすること
- にあると理解出来るでしょう。それは1914年から100年を迎えた時もハルマゲドンが起こっていないからではありませんか？

今一度、考えて下さい

[p.4へ続く]